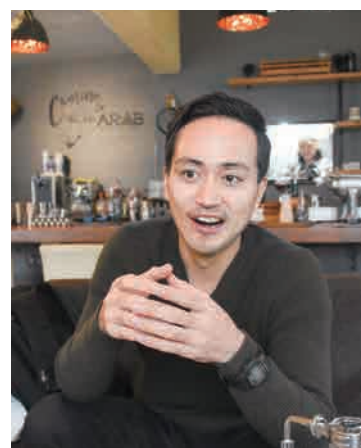




1 親友に成功を誓う。2 役者の傍ら表現の一つとして、制作を手掛けた命名札アルバム。県内複数自治体に採用される



PROFILE

宮平 安春 (35)

浦添市牧港出身。エーгентオフィスタクト所属。特技はキックボクシング。好きな言葉はカーペディエム(=今を生きる)。テレビドラマ『SP革命篇』(フジテレビ)テロリスト平沼役、特撮テレビドラマ『仮面ライダー電王〜第43話〜』(テレビ朝日)、テレビドラマ『運命の人』(TBS)、映画『くらげとあの娘』他多数出演。沖縄出身俳優の津嘉山正種さんのように発信力のある役者になりたいと意気込む。沖縄を題材にした作品への出演を熱望する

ROAD

輝く人たち No.35

うちなーんちゅと
しての誇りと
心に輝く星



「も」ともと表現することが好きで、表現する仕事をしたいと思っていた。

そう話すのは、浦添市牧港出身で俳優の宮平安春さん(35)。多くの映画やドラマ、舞台などに出演し活躍する注目の俳優です。

俳優を目指すきっかけは、映画『ラストサムライ』。高校卒業後、一度はパソコンでデザインすることを学ぶ専門学校に通いますが、「やりたいことは、これじゃない」と、自分が本当にやりたいことに向き合います。映画を作ることに興味があったという宮平さん。ちょうどその頃、『ラストサムライ』を見て感銘を受けます。「あの映画のように沖縄のことを表現できたらいいな」と漠然と思ったという宮平さんは、映画・俳優の専門学校に入学し、当時を振り返り宮平さんはこう言います。「自分は劣等生だった。周りにいる人たちは昔から子役をやっていたり、役者経験者が多く、みんなは喜怒哀楽を演じる指示にもうまく対応していたが、自分は付いていけなくて落ち込むばかりでした」。カメラの扱いや脚本の書き方など、制作と併せて演じることにしても学んでいきました。

それでも腐ることなく前を向いてこられたのは、「地元沖縄の親友・又吉慶の存在があったからです」と宮平さんは言います。「落ち込むたびに慶に電話して、通っていた学校の校長が津川雅彦さんで、一緒に映画の話をしたことや、講師として有名人がたくさん来るなど自慢話ばかりしました。それを『すごいな』『すごいな』と言って聞いてくれるんです。それが私の支えでした」

親友に支えられ精進する日々。ある日宮平さんのもとに一報が入ります。不慮の事故により親友が危篤であると。帰沖するも親友は意識が無いまま。その時親友の母からこう聞かされます。「いつもあなたの話はばかりしていたよ。あいつはすごい。いつか絶対テレビに出て活躍するんだ」と。それを聞いた宮平さんは、「慶に『お前どこで何やってる!』と言われそうな気がして親友の回復を信じ東京に戻りますが、その翌日慶さんは帰らぬ人となり天国へと旅立ちました。

悲しみを乗り越え、親友の死をきっかけに本気でプロになることを決意したという宮平さん。芸能事務所を約50か所以上突撃訪問し自分を売り込み、現在の事務所に所属するに至ります。

俳優を目指して十数年、これ一本ではまだまだ生活ができるわけではないという宮平さんですが、その顔は充実感に溢れています。「自分の強みはうちなーんちゅであること。なんくるないさーと、悲惨な歴史を乗り越えてたくましく生きてきたおじいおばあたちに接する中で、沖縄のポジティブさを表現できる役者になりたいと思うようになったんです。その思いは年々強くなっているんです。この思いがある限りは続けられる」と宮平さんは目を輝かせます。

「自分はこうなりたい」という目標や、すべきことに対して怠けたことは一度もない。そう自負できるのは、亡くなった親友・慶が、北極星のように自分の中に輝いていて、ブレない心の目印になってくれるからです。命日にはビールとタバコを買って必ず海に行って一年の報告をするという宮平さん。「あいつに恥ずかしくない報告ができるよう、一度しかない人生、自分にしかできないことを楽しみながらやっていきたい」。

心の中に煌々と輝く星にそう強く誓う宮平さんはうちなーんちゅとしての誇りを胸に、これからも自分を表現し続けます。